

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 銀色の雨 : 小説 |
| Author(s) | 紫葉 |
| Citation | 龍南會雜誌, 154: 117-137 |
| Issue date | 1914-06-20 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/6332 |
| Right | |

朝になつてその家の下僕は、材木の後に。凍死した子供の死骸を見出した

(終)

銀色の雨

紫

葉

角を一つ曲ると

『たゞ淨満町と言ふたばかりでは分りませんな』私は袖の中に手を引込めて、半ば考へて居るやうな口調で左う言ひました。

『久太郎さーん』

松三さんは不意に左う呼びました。潤つばい夜の空氣を透して擴がつた松三さんの聲が、何の反響も無く消へて行きました。暫時二人は短い石橋の上であと先きを見返りながら

『一体何處だろな』

『親切に遠道までして廻つて來ても分らせん』

『ほんとに仕様の無い』

『久太郎さーん』

皺喰れた聲で松三さんが又呼んでみましたが久太郎さんの返事は聞けません。松三さんも手を袖に入れて居るので、ぶら提灯の細い柄が袖の中から生ねた様に見えました。かすかに搖れて居る提灯の影が石橋の隙間から下の水面に映つて居ました。水は小さい音を立てゝ流れながら其の上に落ちて來る提灯の影を黄色に

光らせて色々に亂しました。

燭の火は息をするやうにとぼくしました。

『ど、つ、か、未だ彼方の方せな』

道は間も無く爪先上りになつて、二人は國道筋の通りに出ました。理髮屋や小間物屋や荒物屋などの店さきには灯影が明るくさして、其處だけ道が白く模様區切られて居ました。道の中の水溜りには向ふの方の家の灯などが倒さまに映つて居ました。恰度、私達の歩いて居る地面を境にして其下にま一つの世界が出来たやうに思はれました。

私は一足一足、下駄と生じめりの土の間に起る微妙な音律を樂しむほどの心持で、稍俯向きながら歩きました。ふと、松三さんが私より後になつた事に氣が注いで振りがへると、床屋の直ぐ向ふの電信柱の下に立つて、其處の家の入口から、低く腰をかがめて、家の中を覗うて居ました。

見て居ると松三さんはかぐめた腰を伸しもせず、其まゝこゝそゝと其の家に這入りました。久太郎さんでも居たのかなと思ひ乍ら、依然立つて居ると、聽てはしやいだ笑ひ聲が此方まで聞えました。私は吾ともなく後戻りしました。床屋の廣い鏡に暗く、此方の往來が傾いたやうに映つて居ました。其の中に白く私の顔や手足がぼんやりと映つたのが、通りしなにちらと見られました。

松三さんの這入つた家は兩方の家から壓しつぶされたやうな三間々口の小さい家でした。僅かに開いた入口から家の中の様子が判然見られました。中の腰硝子を箴めた障子を通して、四角な火鉢のまはりに集つて居る人達の姿が、腰から下半分宛見えました。

松三さんは提灯を持つたまゝ土間に立つて、人々の居る明るみへ顔を向けて居ました。齒の抜けたあとに落込んだ頬の肉が、光りの具合で痛ましく見えました。

二十七八の顔の白い女が庭の流し元へ通ふ暖簾の影から出て來ました。小ぢんまりと着物を着こなした小格な女でした。度々裏の方へ行つたり火鉢の向ふの茶棚の前に立つて何か取出したりしました。

『既う歸る、わかまひんな』

左う言つて久太郎さんは卷袖の中に手を引込めながら土間に下りて來ました。

『松さん、うちにや内密やき此處へ來ちよつたち言ふちや不可んせ』

皆が賑かに笑ひました。私も外に釣込まれるやうに笑ひました。久太郎さんと松三さんが出て來ると私は言ひました。

『今晚はわ世話になります。』

『た若いのに感心。もう大分あつたる急いで行かんと、大變上手な和尚さんが居るとな』

『何しろ御本山から見えましたんで』

三人は南の方に歩み出しました。金物屋の店先きまで來ると、烏打帽の男が自轉車を道へ寝かして圓い提灯に火を點けて居ました。自轉車の金具が白く光りました。

『裏通りが好からうせな』

『左うちや、本通りは人が多いき道が爛れちよるかも知れん』

硝子障子のある唐津屋の角を廻つて、三人は狭い道には入りました。一方の田には此の前から降り續いた

雨が溜つたまゝ未だ吐き切れず、浅く濁つた池のやうでした、其の向ふに黒い丘が横つて居ました。

『年寄りになると、月夜でも、矢張り提灯が要るてな、困つたもんやなもし、』

松三さんが歎く様に言ひました。私は松三さんが齒のぬけた口を左うしても、ぐぐとして居るのだと思ひつゝ歩みました。松三さんは若い時から方々の國々を廻つて歩いたと言ひます。

『月夜言うても、ほんの西あかり位のもんぢやき、危険うがんすぜ、たゝあんた、日和下駄、いんにやごうじまか、そりや、差下駄なら好かつた』

久太郎さんは稍口早やに左う言ひました。淀んだ様な雲の中に、月のあるらしい所だけは明るく周圍を見せて居ました。松三さんのふら提灯は右にゆれ左に揺れて前へ進みました。山付きのせまい道から曲尺かぢの手
に折れて、三人が一行にならんで細い田の畝を辿るのでした。此處あたりも可なり水が溜つて居るので私は
たゞ道のみ見て進みました。松三さんは自分で提灯を下げて居ては却つて悪いと言つて、先頭の久太郎さん
に渡しました。畝が切れて其所をぢやんと音たてゝ水の流れて居る所や、土の柔らかな所に松三さんは久
太郎さんに教へられて一々懸け聲して飛びました。

た寺は此のま西にあるので、晝ならば既う此の邊からた寺の屋根が杉林の向ふに聳ゐてゐるのが見えるの
です。其方の林の間を行き來する人々の提灯が見え初めました。た寺の山門へ上る石段のある邊りでは提灯
も其れに沿つて上り下りしました。山門の所ではふつゝり消えたり現れたりしました。

『あつ』

松三さんが不意に左う言つたので吃驚して見ると松三さんは片足泥濘ぬかるみの中に突込んで未だ取り切れずにた

るのでした。

『ちやつと失敗うた』

松三さんは度々そう繰返しました。私は『あ、あ』と言つた切りでした。

『ま少し踏張ると好かつたにな』

久太郎さんは振り返つて、霎時して左う言ひました。

『あの、あの白い所が乾いた石ぢや思ふたいな、大けな間違ひ。あつは』

涙の出るやうな作り笑ひをして、松三さんは花嫁が前褌をかゝげるやうにして、ぼそ／＼と歩みました。

『あれまで好む具合に來たのにな、彼處でちやつとやつて了ふた。惜しい事やなし』

山門の下まで來ると其處で待つて居る人力車の灯などが見えました。石段を上り下りする人々の下駄の音が靜かに聞えました。

裏門から上つて行くとき當りに臺所が見えて、かまごの火がかつ／＼と燃えて居ました。其處の暗がり、でう／＼して居る炊事の女たちが灯影に赤みを帯びて、ちら／＼しました。その近所は湯氣で一ぱいになつて居るやうに思はれました。松三さんは内儀さんが炊事の方に雇はれて來てるので、一寸用があると言つて炊事場に行きました。

『澤山な戒弟があるのださうですから、炊事場も忙がしい様ですね』

『あゝ、二百人から上ぢゆ話し、』

私と久太郎さんと跡に残つたまゝ其麼話をして居ました。しばらくして松三さんが出て來ると、敷石傳い

に本堂の方へ来ました。下足番の男に下駄や提灯などを預けて居る内にも、もうた説教の聲が切れ／＼に聞かれました。私は後方の少し空いて居る所へそつと坐りました。偽りない香の匂ひがふんと香つて来ました。黒い羽織の人々の上を這つて佛壇の方に眼を移しました、金欄の打敷きや幕や、大きい燭臺が段々に並んで居るのや、圓い柱やなどを珍らしく眺めました。

た説教は何の話であるのか霎時判断がつきませんでした。直ぐ頭の上の鴨居には南無三世諸佛と書いた五尺ばかりの紙が貼つてありました。その斜先き小さく優婆塞と書いたのが見えました。

………壁を破り塙を越ゆるを以て必ず大盗人とせず、恩を受けて恩を報いざるを之れ大盗人と言ふ。佛さまは憐うた示してゐります………。

私はちつと耳を傾けて居ました。圓顔の和尚さんが壇に上つて居ました。蠟燭の火がちら／＼揺れるたびに、和尚さんの顔には花びらの散りかゝるやうな影が動きました。

何と云ふ事も無く私は唯聞いて居ました。和尚さんの話しの穴探がするやうな氣持や、憐うして心から南無あみだ佛と唱へて居る人々を蔑むと言は浅間しい心は露ありません。沈黙つて聞いて居ると何と言ふ理由もなく心が平靜になつて來るのを感じました。左手の薄ぐらい所から一人た妨さんが出て來て、燭臺の灯をふつと吹き消しました。青い煙かなだらかに渦を卷いて上りました。消したのは又新しい蠟燭を立て、火を移し、燃え上つたのは長い箸で心を剪みました。黒い衣の袖が靜かに動きました。

時々雨もよひの風が吹き込んで、其處等に貼つてある紙がさわ／＼と音を立てたり燭臺の灯が消えさうに倒れてちら／＼すると、場所が何かしら森嚴になつて、和尚さんの聲が、追ひ詰めるやうに迫つて一種悲壯

な感じさへ心を蔽ひました。

……山は高くあつて不偷盜、海は深いがまゝに不偷盜、柳は緑に不偷盜、花は紅に不偷盜、柱は縦に不偷盜、梁は横に不偷盜……。

た説教は水のやうに續きつゝ、和尚さんは其の間僅かに身軀を動かして居ました。た説教が濟むと和尚さんは輕くに辭儀して

……なあーむうー觀世音——。

と流暢に唱へられました。闇い隅で三四人の妨さんがそれに續いてた經を讀み初めました。男も女も蘇生つたやうに動き出して、立つて出口に行くもあり、隣同志で話を初める者もありました。多くの人は授戒に來て居るのでね寺に宿る事になつて居ました。私も出やうとしましたが余り出口が雜開して居るので暫らく立つて居ました。多くの人々の中には私の知つて居る人も五六人ありました。五六人かたまつて立つて居る女の群から、顔だけ知つて居る女なども見付け得ました。香の匂ひ、髪の匂ひ、それ等が絶れ合ふ中から下駄を受取ると私は石疊の上に出ました。

外は僅かに星が見えて居ました。

『た參りでしたの』

ふと恚う言つた人があつたので、見ると彼の女なのでした。柱の影の暗い所に立つて居ました。

『あゝ、參りました』

左う言つたばかりで私は靜かに石段を下りて行きました。

四年ほど前の夏の夜、私には慙う言ふ思出があるのです。

其頃私の家は町のはづれの色街の片隅にありました。彼方此方の二階には日暮れになると灯がついて、何處からともなく淋しい三味線の音が聞え出しました。私は毎日その色街から中學校へ通つて居ました。娼妓や藝者などが歩いて居る後方に通り合せて耻かしい思ひをする事もありました。二三月居て居なくなる女や五年も六年も居る女や歸つては來、歸つては來する女や、種々な女がありました。顔だけは知つて居ても、ついぞ物を言つたりする事はありませんでした。

日暮れ方、用事があつて、私は同じ村の××屋まで行きました。夏の宵には誰も彼ものんびりした氣持でそれに、私の街の風習として門や往還に床几をわいて涼むのでした。慙うした街だけに、氷屋の紅い提灯や、散歩して居る女の姿などがよほど媚いて見えました。

私の用事のある家でも主人は籐椅子の圓形なのを抱へ出して涼んで居ました。腰卷きをした素裸の上に帷子の甚平を着て居ました恰度その側の床几にはあの松三さんが居て。子供と譯も無い事を言つて笑つて居ました。

『まあ掛け』

さう言つて主人は頻りに齒楊子を使ひました。松三さんも此方に向いて

『何處へた出でる。わ、此處までな、まあ掛けよ……………此う云ふ伶俐な人は無いわい。私も随分諸方を、諸方をなもし、廻つて歩いたけんど此んくらいな子供は有りせん』

『ほんまに』

主人も其處ことを言ひました。此處を通つて行く人々が一々挨拶して行くのを、主人は椅子に腰かけたまま、
〃應答しました。

『た幾才です、へ、へ、十八、十八、十八、いよう大きなものやなあ、あ、あの、あの津島屋の娘さんが
ない、是非此の人を養子に貰ふ言うてな』

私の頬は思はず火照つて來ました。

津島屋とは町で名うでの旅館でしたが、主人の佐太郎がかみ方の商人に幾度となく欺されたり、鑛山に手
を出して失敗したりして今は此の先の小さい家に家内残らず引越して來て居たのです。娘と言ふのは佐太
郎の一人子でした。とし、ちゃんと言へば大方の人は知つて居ました。

私は學校へ通ふ度に其の家の前を通らねばならぬので屢々遇ひました。彼女は表ての柱に凭りかゝつて居
たり二階の欄干に兩手で身体を支へて、下の通りを睨と見て居ました。

其れから私は其家の前を通る度に屹度軒下ばかり選つて通りました。恰度入口の所を通る時にとし、ちゃん
もひよこり外へ出てきたりして、二人ともはつと思つた事もありました。慙うして夢のやうな日が幾日とな
く續きました。然し一と日たつても二と日たつても私達は沈黙つて居りました。手紙をやり取りしたり話を
したりする事には私は極めて臆病でした。秋も暮れました。冬を越して春が來ても依然黙つて居るより外あ
りませんでした。

けれども其うして居る内、私は何時とも無くとし、ちゃんに遇はぬ日は何だか淋しい様な感じがする様にな
りました。

兩人は憊うして三年近くを送りました。

翌日も未だ曇つて居て、壓し付けるやうな雲が日光を遮つて居ました。二時頃になると私は又た寺に出掛けました。

態と門の方へ廻つて見ると未だた説教には時間があると見えて、山門の仁王さんの横には五六人立つて居ました。はでなれ納戸色の羽織を着て、赤い模様のある鼻皮付きの高下駄をはいた女や、蛇の目を斜に持った女などが混つて居ました。

すつと其間を通りぬけて右手の鐘樓の所まで來ると、何處を見るときもなく佇んで居ました。恰度、霧雨になつて來ましたけれども傘を鐘樓の石垣に立てかけて手を組んで居ました。

暗い臺所から頻りに出たり入つたりする炊事係の女達が、東の方に新らしく出來た假炊事場との間を往來しました。配達夫が合羽も着ずやつて來ました。眞向ふの差掛けして拵らへた室で、お坊さん達の圓い頭や世話人達の羽織婆などが動きます。頻りに煙草を吹いて居るお坊さんや、黒い衣の下から腕まくりして内の纏絆などを見せて居る坊さんがありました。本堂の裏手から大きな瓜を重さうに肩に乗せて右手の炊事場の方へ行く日雇人が出て來ました。菰からは滴がしたゝつてそれが腕によばひ、大變冷たさうに見えました。

『わい一寸、わい日役』

向ふの室から世話人らしいのが通り掛つた男を見掛けて憊う呼びました。

『わい一寸々々』

男は返事もしずに行つて了ひました。世話人は拍子抜けのしたやうな顔をして引込みました。

私は山門から本堂に行く石敷の上を行き來する人を見て居ると、三々連の女が來ました。眞中の女は時々顔を見合せる藝者でした。つゞましさに歩いて入口まで行くと傘や履物を預けて、やがて差掛けの幕の中に見えなくなりました。幕の間を透して奥の佛壇の燈明が、橙色に見え、外の闇い所と好い調和を見せて居ました。

と其の中から浮いて出たやうに、私と最も親しい友達の母が落着いた様子で出て來ました。茶色の勝つた袷に襦子の黒いのを緊めて居ましたが、私の所まで來ると蛇目を傾けてにっこり笑つて

『お詣りですか、まあ日和が此處ですからね、……わいわい、道が悪う御坐んす』

私は久し振りで此の人に遇ひました。何時歸つたのかなど聞きました。

『うちのからは手紙來ますか、近頃來ましたか知ら……大變忙がし相ですから碌すつば手紙も上げやしないんでせう』

慇懃ことを言つて行き過ぎました。友には一人の姉と二人の妹がありました。五年ばかり前、一番末の妹は一週間ばかりの病氣の後、亡なつて了ひました。其子だけは他の誰よりも賢くて可愛らしかつたので母は一番愛して居ました。七つでしたか、紫色の小さい靴を肩から斜に掛けて、學校に行き來する途中の姿をよく見受けました。私が後悔に行つた時、母はたゞ

『御丁寧に』

と言つただけで何とも言はず俯向いて居ました、

『ね出でなさい』と云つて小さい頭を下けるのだつた彼の妹が今は既う此の世の中には決して居ないのだ。未來永劫遇ふ事は出来ないのだと思ふと、私も悲しくなつて思はず涙ぐんで居ました。それから、友は中學を卒業すると間も無く遠い外國へ行つて仕舞いました。

その人が靜かに行く後姿を見て居ると、其人は私自身よりも、ずつとずつとた寺とは深い因縁がある様に思はれました。

慙うして集つてゐる幾百人の今までの生活の一つ一つ聞いて歩いたら余程面白いでせう。通る人も通る人も何事も無い様な顔をして居ます。此の一人一人が皆一人一人の異なつた世界に住んで居る事實を思ふと、不思議な感じがしました。左うして此所に集つて來る人々が顔ばかり見て今四五日の後には又別れ別れになり、其の次は突き擦すつて通つても知らぬ顔をして居るのだと思ふと、無性に淋しくなりました。

一時間ばかりも立つて居ると、上り口の幕の陰に時さんの顔が見えました。時さんは此方を見てにつこり笑つて、此方へ來いと言ふ様子をして見せました。丈の低い人だけれども圓顔に大きな眼鏡を掛けて、下唇の少しばかり前へ出たのが、何となく懐しみがありません。私は敷石傳ひに其方へ行きました。時さんは其處に有り合せの汚ない藁草履を突っかけにして、濡れた敷石の所まで出て來ました。

『昨日はどうもた邪魔で、ね、あれから宿屋に行つて荷物を引つ擔げち來やんした。どうも慙うも人數が多いのでさくわさ。』

左う言ふ話をしながら額にかゝる霧雨を掌を擴げて遮ぎる様になりました。本堂に上る段の所で時さんの黒羽織の裾には一杯、泥の着いて居るのに氣が注ぎました。

西の方の幕の下に行つて坐りました。誰も不行儀に並んで居ました。煙草烟のが頻にもつれ合つて居ました。時さんは幕の吊綱から風呂敷包みを解き取つて無難作に其處に投げ出しました。そして靜かに坐りました。

本を二冊出して見せました。一冊はた經の本でした。時さんは天仰けに轉ぶと一方の立てた足の上へ一方の足を重ねて、その本を開きました。私は薄い本を取り上げました。………夫坐禪者。直令人開明心地。安住本分。………所々に紅い鉛筆の跡がつけてありました。

『六か敷いもんですね』

『わ』

時さんは顔だけ此方に向けて笑つて居ました。

不意に鐘が鳴り始めました。時さんはむ、む、く、く、起き上つて眼鏡の上から佛壇の方を見ました。人々は前方へ詰めかけて居ました。

『既うた説教ぢや、まつと前ん方が好い』

と言つてすん／＼人々の間を割けて行きました。

一番前列のた婆さん達はもう珠數をかけて手を合せました。其の後方あたりには色の白い顔、黒い顔、瘦せた女、肥わた女、華派な羽織に廬髪を結つた女、丸髻の女、色々な女がみつしり並んで居ました。た説教の壇を境にして向方が女、此方が男、男の方の黒い羽織や緒らんだ頭などの、くすぶつたやうなものに比べて、女の方は余程色彩に富んで居ました。例の藝者も柱の所に見付かりました。取り濟して昵と前の方を見て居

る女の横顔は冒し難い氣色に現れて居ました。毎晩馬鹿騒ぎして夜更しをして、朝は十一時から十二時でなければ床を出ぬやうな生活をして居る女が、什麼心持で説教を聞くのでせうか。私はその横顔を暫らく見つめて居りました。

……色々説き明して聞かせ申したい事が御坐いますが、今度は佛法で申します南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、之を三歸戒と申しまして、第一南無歸依佛、先づ之れから説き明しをして聞かせ申す……。

に説教が始まると場内は森ぞしました。和尚さんは淀みも無く話し續けました。

外面は雨だけは降り止んだらしく、子守の女などが庭で遊んで居るのが見られました。そして其處ら中に、牛乳のやうな柔らかな光線が満ちて居ました。長い間、恙うして欠伸もせず聞いて居る私自身を、何となく可哀く思ふ様な氣持が動きました。と、つい涙が潤んで思はず下を向き、そつと眼を拭いてそのまゝ以前の薄い書物をつまぐつて居ました。和尚さんは何か長い譬語をして居ました。講談師の言ふやうな文句は抜きにして、直接私達の胸底に其鳴を起す様な説教ならと思ひました。然し左うして聞いて居る間に何時か話の中に巻き込まれて、他の人達が哀れだと思ふ時には私も哀れだと思ひました。そうした後から、あれが何故悲しいのだらうなど、屢々思ひました。

……南無と縋り申して歸は行きて復らず、依と心の依り所は佛でございます。心に佛を思ひ口に佛の名號を唱へ、姿が恙うして佛となれば、身口意三つ揃つて佛である故に其の身そのまゝ佛である。既に此の身が佛となれば大千世界は吾のあらはれである故に大千世界は佛である……。

人々はめい／＼南無あみだ佛を繰返して唱へました。

時さんと一緒に外に出ました。未だ外は明るくて、山門の周圍の菓子店や果物店が店をしまはずに居ました。参詣の人々は續いて出て来て彼の石段をこつり／＼と降りて行きました。た説教を聞いてそれをしみじみ味はひながら、家へ歸つて行く氣持が漸く分つて來ました。

然し家に歸つた頃は既う電燈がぼんやり点いて居ました。人數の少ない私の家は何時歸つて來てもひつきりして居ました。臺所から直ぐ二階へ上りました。未明の『女』にある様な薄ぐらい階段が私の内にもあります。闇の世界の入口かと思はれる陰鬱な階段を靜かに上りつくして一方の襖を開くと、其處はぱつと明るくなつて、眞個に光明に接する嬉しさは慙麼ものであらうかと思ひます。

隣家の据ね風呂に、這入りに來て居る人々の話し聲がちら／＼と判然聞えました。近所の人の噂や今夜芝居を見にゆくと云ふ話やなどでした。その晩、何時もの通り三時間ほど書物を読みました。下階でも何か話して居ました。誰だか判然は分りませんでした。下りて行く氣になつて机の側を立つて襖を開きました。丁度下から唯か上つて來ましたので待つて居ると松三さんでした。手に何か持つて居るのに直ぐ氣が注ぎました。

『わ、いた氣の毒ぢやがなもし』

左う言つて内に這入つて來ました。手のものは四角な箱で白紙で包んだ上から水引きが掛けてありました。進物だと氣が注ぎました。

机の側に坐り直すと松三さんは直ぐ其の向うの方に坐りました。

『毎度申兼ねますが、誠に、何卒これに一つ』と言つて机の上に箱を置きました。私はその紙の皺を指で直しながら

『ね進物ですね、何と書きませう』

『さあ、何と書いたら』

『何處へた上げなさいます』

私は筆へ墨を付け／＼尋ねました。松三さんは手を疊について變な様子をして居ました。

『なあに、あの、津島屋へ、此りやた雛様ですらい。只御雛とでも、ねへ………什麼でも』

『左うですな、ぢや』

私は容易に筆を下し得ませんでした。

津島屋のどしちやんは其の後結婚して今は子供も出来たのです。暫くして思ひ付いた様にさつさと書いてしまふと私はそのまゝ机に凭れて松三さんの方を見ました。

『うまい者やな、雛の字は何片ですぞ、ね、六ヶ敷い字ですな。』

其麼こと言つた所で嬉しいとは思ひませんでした。其の晩は何時に無く靜かな夜でした。私は床に這入つて天井に映つて居るランプの影の明るい所や暗い所などを無心に見て居ました。

親の恩は海よりも深く山よりも高いと和尚さんが言ひました。生みの恩は恩の最も大なるものぞとも言ひました。是れが實際でせうか。和尚さんの説教は左う言ふ肝心な所へ行くと極く荒握みにしてゐて直ぐ

反らして了ふのが此の上も無く不満でありました。然し、いぢやんと遇つて淋しい此の力は何物の力でありませうか。

私は急に心細くなりました。私は、う、つ、ら、／＼に眠りました。今夜此所に寝て居る私が明日は伊太利亞あたりの柔らかなベッドの中に見出されはせぬのでせうか。それで無ければ私と同じ人間と言ふものが今一人何處かに住んでは居ないでせうか。

唯一日天氣が好かつた切りで今日も亦雨でした。

食事をする時、昨日の藝者が用があつて來ました。今さつき起きたただけと言ふやうな支度をして居ました。ほればつたい臉に何處かまだ眠さうな色が漂つて居ました。

『兄さん、昨日はた寺に來参りでしたなあ』

茶を飲みながら左う言つてに、／＼しました。私は一寸そちらの顔を見て笑つたばかりで何とも言ひませんでした。

『わちいさんか何かの様に毎日参るのよ』

母が恁麼事を言ひました。藝者は未だ私の方を見て居ました。

『有難うますな、ほんにた上手な説教だすわ、小母さんも参つてゐなあれ』

食事が済むと私は又出掛けました。傘の柄が少し冷たい程に感じられました。た寺に近づくだけ周圍に人が増して來ました。日に日に恁うして通ふ人だけでも百五六十人はある様に思はれました。然し左う言ふ人

達が自分自分で違つた考へを持つてた寺に集まるのだと思ふと、ひよつと先刻私の遇つたお婆さんの事を考へ出しました。お婆さんは六十近くで家は豆腐屋です。娘の三十五六になるのが始めの良人と別れて久しく獨身で暮して居ました。然し子供は自身の方に引取つて居ました。その後或る旅の者と一緒になつて子供が三人出来ました。男は三年程たつと國へ歸つたきりふつり來なくなりました。お婆さんは自分のお阿母さんが在世の時分は裏のせまい所にたし込んで食べ物も碌に與へなかつたと噂される程の人で、近所では慾のかたまりの様に言はれて居る様な人ですから、娘との間が兎角折合ひませんでした。六十になつても禿げ上つた頭に手拭鉢巻を緊めて朝から晩まではあす／＼言つて居ます。或る頃、さはりがあるとかで占者に見て貰つたら今まで余り我慾を張つて不義利な事をしたからでこの事でした。それから物貰ひが來てもついで喜捨した事の無かつたのが、一々會釋して物を與へたり、お茶を飲ませたりしました。娘と口論をしい／＼薪賣りの女などに香の物やお茶を出したりしました。

『それとも參りたいけん、と暇が無けん、わんだ二人分がんでお呉れよ』

先刻お婆さんは例の通り向ふ鉢巻に蹠蹠で、肥料桶をかくて來ながら、あの畑の所で私に左う言ひました。

『へ／＼』

私は素直に左う言つて行き過ぎました。

『御信心ですわね』

近所の長屋に居る年増の奥さんが、感心したやうに左う言つた事も思ひ出しました。私は人々の間に混つ

て其處を考へながら静かに歩きました。年頃の娘達も随分居しました。大抵は白足袋の上からカバーを付けて居ました。着物の裾の汚れぬ様に、女たちはめい／＼氣を注げて歩いて居ました。少し泥のある所は抜き足して行くので後の者は酷く待たされました。女たちは時々崩れる様に笑つて居ました。其の笑ひ聲の中には世界を我が物にした様な傲慢な影が包まれて居ました。

使に行つたか、料理屋の女が人々の間を別けて私達とは反對の方へ行きました。間も無く後方でその女の聲が聞け、續ひて其れにからかふ男の聲が聞けました。男は此方へ歩んで居るやうでした。簡單な英語の單語などで卑猥な事を叫んで居ましたが、私は彼の女どもの白粉や紅を付けて化粧した顔に、他とは不釣合な眼が、何とも言へぬ厭らしさを持つて居るのを思はずには居られませんでした。又左うして得意になつて取合つて居る若い男どもの事も色々に考へられました。『世の中は男と女の關係ばかりである』『眞理は絶對でなくて相對である。行爲の屬性である。従て眞理は千差萬別でなければならぬ』慙うした或る人達の言葉が頭に浮んで來ました。

本道から山門までざつと百間ばかりの間は又二三日前のやうに泥濘になつて眞中の敷石の上まで蔽つて居ました。此處から參詣の人々は一列に並んで歩きました。日雇の男が二三人、鍬で石の上の泥を取つて居ました。男どもの足は太腿あたりまで泥が付いて居ました。人々は何とも言はず其の石の上を辿りました。女達の高慢らしい態度も眼に付きました。

山門を這入ると直ぐ、本堂の幕の下に並んで居る學生達の赤い袴が眼に付きました。本堂では何か儀式中でね説教は未だ始まつて居ませんでした。私も様端の幕の側に行つて傘を閉ぢました、學生達は此方を見て

は何か話して居る様でしたが、私は其麼事などに恥かしい思ひをしたり極り惡ひ様子をしたりする程、若々しい氣分にはなれませんでした。彼等を普通の女として見るには私は私の内心の呵責が余り激しいのに氣注ぎました。人として心置き無く自由に相手にし得る女を欲して居ました。

雨だれが週期的な律をなして前の石の上に落ちます。庫裏の方から相合傘の女が出て來ました。何方も四十ばかりの奇麗に眉を落した女でした。其處らに立つて居る多くの人々を一々見廻しながら、着物の肌觸りや新しい塗下駄の穿き心地を楽しむ様に、時々帶のあたりや袖の邊を見たりしながら頻りに笑つて居ました。紅や鐵漿を着けて居る上に着物の袖口から紅色の下着が見えたりしたのが、何となく賤しい様に思はれました。

何時もの様に時さんが上り口まで迎ひに出て呉れました。私は直ぐに上りましたが、施餓鬼中でしたから獨りで本堂の裏に廻りました。矢張り他の人も此處に來て式の濟のを待つて居ました。

狭い廊下沿ひにそれ等の人が並んで居る中には白髪頭の田舎の爺さんが一方の手に紙袋をぶら下げて頻りに饅頭を食べて居ました。食べる事より外に何の飾り氣も無い野心も無い、子供の様な眼をして居る爺さんが溜らず慕しく思はれました。そして其處に人生の誠の姿が朧ながらも現れた様に思はれました。

それを見て居ると、廊下の向ふの曲り角から、彼の鴨東の女の中にでも見るであらう様な美しい女が歩いて來るのが眼に映りました。ふつくらした頬と艶やかな廂髪と、透き通る程白い額と、それはどしちやんでした。私は急いで眼を反しました。そして廊下の端の明るい所へ來て向方の山を見上げました。

前の山は私達が七つ八つの頃、屢々椎の實を拾ひに來た所です。水色の紐の付いた着物を着て、其頃流行

つた小さい竹籠の赤と青とが入り違ひに組まれたのを提げて、友達と二人連れでよく來ました。年輩なのは彼の豆腐屋の婆さんの子でしたが余り性質の好い方では無かつたので私は悲しい目に遇つた事がよくありました。彼れは拾つた椎の實を皆に出させて、一緒にして頭割りにしたりしました。私は自分の拾つた椎の實の半分も貰はぬ事がありました。すると私は黙つて籠の中の椎の實を大地に溢して、籠だけ下げて歸つて來るのです。彼れが後から追かけて來て又自分の椎の實も一緒にして呉れやうとする事も度々でありました。其頃、此の向ふあたりに稍廣い場所があつて其處に大きな椎の樹が四五本、枝を交へて居た様に思ひますが、今では皆目見當が付きません。然し印象と言ふものは何と言ふ尊いものでせう。十二三年前の幼な姿があり／＼と眼に映つて來ます。その頃の無邪氣な子供から今の青年に成るまでの過程が、即ち本具の眞性、本地の佛性から遠ざかつて行く過程であつたと言ひます。

牛乳のやうな柔らかな光線の中を、銀色の雨が薄光つて降つて居ます。ふと振り返る途端、私の瞳は直ぐ後方に來て居たとしちやんの瞳と合しました。

——一九一四、三、二五——

大・阿蘇を仰ぐ

芙 蓉 生

大阿蘇の偉容と其の絶大の力とを現はせる噴煙に接せんことは我が年來の渴仰なりき而して遠望を恣にするに至り一度登岳して目のあたり亨けし印象は我れ長く忘るゝ能はず

描きては消す描きては消す異形の面魔の姿